

多地点テレビ会議サービスを低コストに実現 キャリアクラスMCUで新市場開拓

テレビ会議サービスの提供には、多地点接続装置(MCU)はもとより、課金機能など数々の付加機能が必須だ。日立ハイテックは、それらの要求にすべて応える「キャリアクラスのMCU」を投入する。

文 坪田弘樹(本誌)

移動・出張費の削減、意思決定の迅速化といった効果が浸透するにつれ、テレビ会議の利用の裾野が拡大している。大企業から中堅中小へという流れに加え、最近ではシステムの大規模化も進んでいる。

テレビ会議の効果は、拠点数・利用頻度が増えれば増えるほど高まる。2拠点よりも5拠点、10拠点が参加する会議のほうが、経費・時間ともに効率的なのは道理だ。

特に最近では、利用シーンが「会議室」に留まらなくなっている。専用端末だけでなくPC、スマートフォンやタブレット端末など多用なデバイスが相互につながり、場所を問わずに“ビジュアルコミュニケーション”を多用する時代の到来も近い。

「そこで、多地点接続装置(MCU)の役割がますます重要になる。大きなビジネスチャンスがある」

そう語るのは、日立ハイテクノロジーズ・ITソリューション営業本部ネットソリューション部の近藤忠雄部長だ。

MCUも「所有から利用へ」

日立ハイテックは1999年から、テレビ会議システムの事業をスタートした。「端末ではなく、多地点会議を実現

するためのインフラ構築を軸としてきた」と、大規模案件を中心に特色ある事業を展開。もちろん、中核商材はMCUだ。

その同社は1月、新たなMCU製品として、米コンピューネティクス社の「EVERGREEN」の取り扱いを開始した。特徴は「従来のMCUには無い拡張性と信頼性」で、近藤氏は「キャリアクラスのMCU」と評する。これを武器に大規模案件の開拓をさらに進める一方、テレビ会議/多地点接続サービスを提供する通信事業者やサービスプロバイダー(SP)などの顧客も開拓していきたい考えだ。

MCUの導入には、初期コスト・運用管理コストともに膨大な費用がかかる。ビジュアルコミュニケーションの利用シーンの増加、多様化に賢く対応するために、通信事業者/SPのデータセンター内に設置されたMCUの“機能”を必要な分だけ使える多地点接続サービスへの需要が高まることは間違いない。

これまで国内では、NTTビズリンクをはじめ数事業者しか提供していなかったが、昨年来、NTTコミュニケーションズ(2010年1月)、日立ソリューションズ(同12月)などが新たに多地点接続サービスの提供を始めて



日立ハイテクノロジーズ
ITソリューション
営業本部
ネットソリューション部
部長
近藤忠雄氏

いる。クラウド事業を展開する通信キャリア/SPにとっての有望分野の1つであり、これまで10年間にわたってMCU関連のノウハウを積み上げてきた日立ハイテックにとっても、魅力的な新市場となる。

450のHD端末を収容

コンピューネティクスが開発したMCU「EVERGREEN」は、多地点テレビ会議を自社構築するエンドユーザーだけでなく、多地点接続サービスの提供にも適した特徴を備えている。

第1の特徴は拡張性だ。機能拡張カード(メザニンカード)と、メザニンカードを格納するキャリアカードの追加により、利用規模に応じて計画的にポート数を拡張できる。シャーシは、最大15のHD(High Definition)ポートが搭載できる「Cedar」、HDポート数が最大45の「Cypress」、同最大90の「Sequoia」の3モデルを用意している。

さらに、ファイバーリンクによって、最大5台のMCUを接続できる。カスケード接続が不要で、5台(HD画質で最大450ポート)を1台のMCUとし